

**原著論文**

チャングーのスポーツ変容化：  
エクストリームスポーツの要素に注目して

豊島 誠也\*

**The transformation of Qianggu into a sport  
: Focusing on the elements of extreme sports**

Seiya TOYOSHIMA

**Abstract**

A study on the transformation of traditional Taiwanese sport: On the elements of "Extreme Sport" in Yilan Toucheng Qianggu

The "Toucheng Qianggu Folk Culture Festival" is conducted as an annual local event in Toucheng, Yilan County, in the North-East of Taiwan. Qianggu takes place in July according to the lunar calendar (August in the solar calendar) during the period called chugen-setsu (Zhongyuanjie) and is said to have been introduced from Fujian Province in China about 200 years ago. A characteristic of Qianggu is the incorporation of competitive elements such as scrambling for a flag, attached to a high pole about 20 meters above the ground.

Qianggu was originally considered a religious and cultural activity. While previous studies did point out that Qianggu was a sport, the element of participants "enjoying the extreme thrill" through taking part in a competition high above the ground only recently gained attention. This element of thrill can be regarded as a characteristic of "Extreme Sport" which is a new genre differing from traditional competitive sports. Extreme Sports as an aspect of "extreme thrill" are portrayed in the media as sports involving danger popular among young people. The aim of this paper is to discuss the transformation of Qianggu into a sport, especially focusing on its similarities with elements of extreme sports, while considering its traits as a traditional sport with underlying values and innovative aspects.

**keywords: Qianggu, Sports, Extreme sports**

キーワード：チャングー, スポーツ, エクストリームスポーツ

---

\* 広島大学大学院

## I はじめに

台湾の宜蘭縣頭城では、“頭城搶孤民俗文化活動（トウチェンチャングーミンスウェンファホウドン）”（以下、チャングーと略す）と称する民間行事に伴った活動が行われている。台湾の北東部、宜蘭県では、旧暦7月（太陽暦では8月）は中元節と呼ばれる時期にチャングーは行われ、200年ほど前に中国、福建省から台湾に伝わったといわれる。チャングーの特徴的な点としては、地上20mほどの高所に取り付けられている旗を取り合うといった競争的要素を含む点である。

チャングーは元々、宗教・文化活動として行われてきた。そうしたチャングーがスポーツとしての一面を持つということは、これまで先行研究において指摘されてきた。しかし、近年では競争的な要素にとどまらず、高所で展開される競技であることでの“極限状態を楽しむ”要素が付与された見方がされる。これは、従来までの競技スポーツの領域を離れた新たなジャンルとしての“エクストリームスポーツ”として捉えることができる。エクストリームスポーツは“極限・過激”な一面を持ち合わせ、メディアでは、若者を中心に人気の、危険を伴うスポーツというイメージで用いられている。これまでエクストリームスポーツを研究対象とすることが多いカルチュラルスタディーズにおいて、エクストリームについては、「サブカルチャーから誕生し、近代スポーツ批判の要素を持つことが指摘されており、1960年～1970年代に発展してきた」（252-267）と言われ、日本では山本(2013)がそれらを「スポーツ・サブカルチャー」と総称している。

日本におけるエクストリームスポーツは、菊(2015)によれば、近未来のスポーツとして、「人間の身体自身に依拠しつつも、その可能性を危険の臨界点にまで高めて、スピードや高さ、あるい

はその華麗さを競い合う過激なスポーツ」（903）と定義する。学術研究でのエクストリームスポーツを扱ったものは少ないものの、水野(2015)はそれを、何らかの極限・危険性の要素を持ったスポーツの総称とし、サーフィン、スノーボード、BMXなど若者文化に影響を与える比較的新しいスポーツが該当すると述べる。加えて、サブカルチャーとして、若者文化（とその市場）に多大な影響を与えていることも指摘されている。

立ち返って、本論での研究対象とするチャングーは、宗教的な民間行事に伴って行われている伝統スポーツであることを考えれば、到底、そうした近未来スポーツや若者のサブカルチャーとしてのエクストリームスポーツとはそぐわない印象を受ける。この新旧、そして“伝統と新規”とも言い換えられるスポーツがいかように交わるのか。この点が本研究での最大の論点といえる。チャングーは伝統的活動として、高所で旗を取り合う速さを競うものであるが、そこに到達するまでの危険性や極限的な状況での様相は、それこそエクストリームスポーツの定義として先に挙げたように、「危険の臨界点にまで高めて、スピードや高さ」、「その華麗さを競い合う過激なスポーツ」という定義にびたりと当てはまるものである。

そこで本研究の目的は、チャングーのスポーツ化について論じるものであるが、ここでは特にエクストリームスポーツの要素との接点および共通点に注目し考察する。そのことで、チャングーがこれまでは伝統スポーツとしての宗教・文化活動の側面を纏いながら、地域住民に継承されてきたのであるが、実はその内側に新規とされるエクストリームスポーツの要素を内包し続けてきたことが理解されるからである。それは、この時代に新たに若者を魅了するとされる“極限状態を楽しむ要素”について、エクストリームスポーツという分析概念を用いることで明らかにすることができるのである。

本論文は人類学的方法と歴史学的方法を総合するもので、現地のフィールドワークは2019年8月～2020年8月の間に行われた。

## II 先行研究の検討

これまでチャングーに関わる先行研究では、主に宗教性とスポーツと捉えるかどうかにについての議論がされてきた。1. ではチャングーの宗教性に着目した研究、2. ではチャングーのスポーツ化について考察した研究を挙げ検討する。

### 1 宗教に着目した研究

#### (1) 林正芳・邱彦貴・劉俊廷・姚伯勳・陳詠笙 (2011)

頭城搶孤：歴史、祭典與工藝 蘭博研究

チャングーは宗教（道教）行事の一環として行われてきたが、これまで日本人を含め、台湾では宗教行事としてのチャングーを取り扱っている例がある。林ら(2011)の著書『頭城搶孤：歴史、祭典與工藝 蘭博研究』では、頭城搶孤について歴史から紐解き、行事の内容、チャングーの各部位に関する情報について幅広く記されている。この書では主にチャングーを宗教行事の一つと捉えて研究がされており、道教の神に関する情報や、チャングーが行われる頭城地区の寺などの情報も詳細に記録されている。

#### (2) 可児弘明 (1976) 農曆七月の台湾農村 (公普, 搶孤):

民衆道教の周辺 (その五), 史学, 47(3), 45-213.

数少ない日本におけるチャングー研究の一つであり、この研究では宗教行事としてのチャングーと、その周辺地域の道教信仰の状況が記されている。日本においてチャングーの研究は非常に少なく、管見の限り、戦後については可児の研究のみであった。戦前のものでは、鈴木(1934)の『臺灣舊慣冠婚葬祭と年中行事』という書の中で、7月の宗教行事として紹介されている。その他にも

1935年～1936年にかけての新聞、台湾日日新報の記事にも、宗教行事として記されているものがある。

### 2 チャングーのスポーツ化に着目した研究

#### (1) 龍炳峰 (2012) Taiwan Qiangu Huodong Lishi Fazhan

Yu Quanli, 84 Selina Ching CHAN Xingbie zhi Tantau 臺灣搶孤活動歷史發展與權力, 性別之探討 52:51-80.

この研究では、チャングーを歴史的研究方法で先行研究とメディア等を中心に考察がされている。その中ではチャングーの歴史に触れつつ、チャングーにみられる男性中心の権力と、女人禁制を背景とした性別による参加制限についても分析がされている。

また、チャングーが観光化、スポーツとして変遷していく中で、宗教上の女人禁制というタブーが、女性がチャングーに参加する機会に依然として不利に働いているとしている。その要因は、道教の祭りでは男性の参加が好まれてきたこと、危険性が高いということから、性別のタブーが常に存在すると指摘されている。

論文の中で龍は、スポーツとしてチャングーを見たとき、決して女性の参加は不可能ではないと主張する。スポーツクライミングでは女性の参加も確立されており、競技としての参加は可能であると考えられる。チャングーが観光の資源であり、スポーツとしても海外からの参加も見られる点からも、チャングーの宗教部分に配慮し、男女の公平性も担保する必要性が述べられている。

チャングーは道教という男性中心の考え方をもちつつも、スポーツとしての一面も現れ始めたことで、明るみになったジェンダーの問題を考察したのがこの研究の主な内容である。

#### (2) 許澤耀 (2010) 從神聖到世俗—以頭城搶孤為例

この論文では、清の時代からのチャングーを考察しており、清においては台湾の宗教文化を象徴

してきたチャングーが、どのような歴史的変遷を経て現代に至っているのか、その変化について述べられている。

その中で許は、チャングーを文化・宗教活動としてだけでなく、観客を魅了する民族観光スポーツとしての機能を指摘する。許が意味するスポーツとは、1991年から再開されたチャングーに、特にその特徴が体现されているとする。それは以前の方式とは異なり、新しい競争の姿やチームで協力をして登っていくというルールが設定され、当時の台湾の国民、宗教界、スポーツ界に衝撃を与えたと述べる。しかし、これまで宗教活動として認識をされてきたチャングーだが、元々、スポーツ競技としてのポテンシャルも持つとして、スポーツへの変遷も偶然ではなかったと主張している。その点に関して許(2010)は論文の中で、張志堅(1995)<sup>(1)</sup>のチャングーの特性について触れ、次のように説明する。

#### ①競争に必要な能力

チャングーの柱は滑りやすく、登っていくことが難しいため、登りきるのに約1時間を要する。チームで一人が体力不足であるとチームの妨げになる。簡単に言うと、チャングーは体力と持久力の力比べである。その為、勇気、意思力、恐怖に打ち勝つこと以外にも、体力を向上させて臨む必要がある。それがチャングーの成功の鍵になる。

#### ②運動スキル

- a. 体操…チャングーには体操の要素が織り込まれており、登っていく際にその体操の動きのようなスキルが必要である。
- b. クライミング…クライミングは人類にとって、自然で生きていくための原始的な動作の一つである。したがって、原始社会では生きていくこと自体をスポーツと捉えることができる。クライミングなどの人間が生活の上で培ってきた行動は、宗教活動からスポーツへと変化している。

例えば、宗教活動のチャングーとスポーツクライミングのような高速で登っていく同様の動作の例がそれである。

- c. チームの精神…チャングーはチームでの参加が義務化されている。その為、登っていく際には、チームワークが必要になる。ここでは個人主義は抑制され、チーム競技としての精神が強調される。

また許は金(2000)の、チャングーがスポーツとしてある現在の姿に注目した論文を引用している。そこではチャングーはチームでの参加に意義があり、チーム精神が地域住民への住民意識に刺激を与えていると述べる。

許は加えて、チャングーは民族スポーツとしての活動であり、近年は地域以外からの参加、海外からの参加がみられることから、全体的な地域コミュニティの計画として、地域の特性も兼ね備えたスポーツへと発展するポテンシャルを持つと予測する。しかしながら、宗教・文化など、伝統的な部分も残すには、スポンサー採用することに慎重に取り組む必要性を示唆している。

以上のように、宗教行事としてのチャングーを取り上げた先行研究については、信仰との関わりという側面から読み解いていることがわかる。一方で、チャングーをスポーツとして考察している研究については、それぞれジェンダーの問題を取り扱ったもの、スポーツ競技のスキルとの関わりに焦点をあてたもの、地域スポーツとしてのチャングーとコミュニティ内の連帯に関する内容に限られたものであった。

本論では、これまで問題として扱ってこなかった、新規のスポーツカテゴリーとして“エクストリームスポーツ”の特徴に注目する。そこでは従来までの競技性や合理性といった国際スポーツの枠組みから“ハミ出した”要素である“極限性”

や“危険性”を魅力として参集する若者たちがおり、一方では伝統行事としてみる従来までの地域住民の眼差しもある。以下では、そうしたチャングーの歴史的背景を踏まえた上で、事例研究を通じて新旧の価値観を内在する伝統スポーツとしてのチャングーの諸相を述べていく。

### III チャングーの概要

#### 1 チャングーの由来

チャングーは元々、中国の福建省で行われていた活動である。樊(2013)によると、福建省南東部にある漳州が起源とされており、1380年代頃から行われていたと言われる。また、許(2010)によると台湾の文献上、チャングーに関する最も古い記録は清の道光時代に王必昌によって書かれた『重修台湾縣志』(1751年)のものとして、そのなかでは人々が槍孤に登っているような記述が見られる。台湾の資料上、台湾のどの地域からチャングーが開始されたかは不明であるが、およそその予測としては、台湾から中国大陆に比較的近い離島の澎湖島を経由して伝わったといわれる。また、少なくとも清の時代には既に台湾最南部の屏東県には存在していたと言われる(林ら, 2011)。チャングーは台湾へ伝わって以降、各地で行われていた。そのほとんどが寺院やその付近で催されていたと言われる(図1を参考)。また、北部では主に仏教、南部では道教が主催で開催されていたとされる(樊, 2013)。

しかし、チャングーはその後、戒厳令や安全性などの観点からたびたび問題視され、中止に追い込まれることとなる。その結果、現在は2か所のみ残された活動となっている。その2か所の内の一つである、台湾最南部に位置する屏東県で行われる恆春のチャングーは、中元節の7月15日に行われている。そして、もう一つの頭城チャングーは、鬼門が閉まると言われる7月29日か

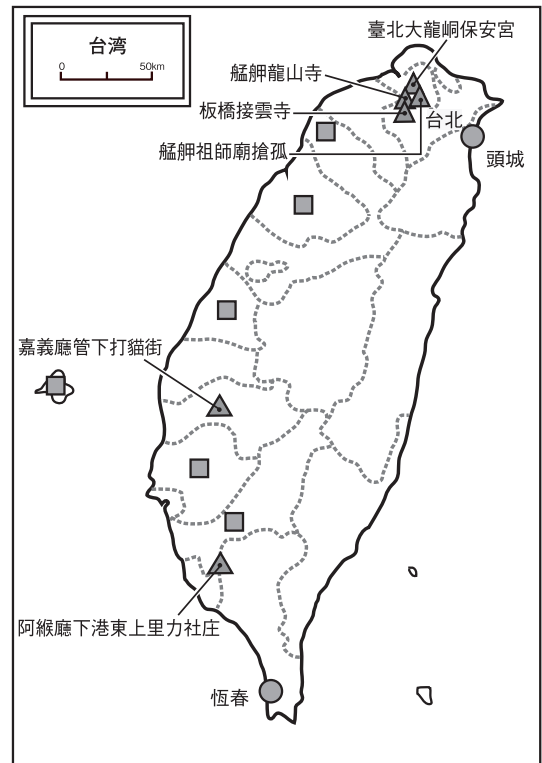


図1 過去に行われていたチャングーの場所と現在行われている頭城、恆春の場所

- ▲は過去に行われていた場所
- は過去に行われていたが、名前、正確な場所は不明
- は現在行われている場所

30日(年によって30日の有無が変わるため)に行われている。

### IV 頭城チャングーについて

#### 1 歴史

チャングーは台湾へ渡ってきた移民が自然災害、病気、または戦死した人々、台湾海峡で亡くなってしまった人々の供養をするために行われてきた。しかし、このチャングー自体、過去3度禁止された時期がある。許(2010)によると、1回目は1884年(清朝末期と中華民国初期)にその危険性と戦争的要素を含むという理由で劉銘傳<sup>(2)</sup>によって、この活動は禁止されていた。後に日本



統治時代になると宜蘭県頭城では1897年以降にチャングーが行われたという記録が日本人研究者によって報告されている。2回目は1937年に第二次世界大戦のため中止を余儀なくされた。その後、1946年から1948年に実施される。3回目は1949年から1991年まで、戒厳令下であったこと、また安全性の理由で中止された。しかし、その後、戒厳令が解かれ、地域の文化活動が徐々に自由に解放される気運も高まり、さらに安全面での改善も加えられたことで、再開されるに至った（許，2010）。その際には、複数の安全対策（落下地点への安全ネットの設置等）が施され、現在、頭城搶孤は無縁仏の供養からのみならず、観光やスポーツとして捉えられている側面がある（『臺灣宗教百景』，2020/04/25）。

また、史料には日本統治時代当時、鈴木(1934)が頭城のチャングーについての様子を記述したものがあ。その中では頭城チャングーと台北州(現在の台北市)の板橋接雲寺のチャングーの詳細が記されている。当時の頭城チャングーについて鈴木は、

「搶孤は手の到らざる高さに作り置くため、容易に其の供物と旗(順風旗)を取る能はず、爲に暴力を伴ふを常とし、互いに入り亂れて殺到強奪する爲め、恰も戦場の如く雑踏し、修羅場を演じ往々にして死傷者を出すことがある」(453)と記述している。

以上の記述から、当時は供え物と順風旗を取る為、参加者は暴力を振るいながら、無秩序な状況下でチャングーに参加している様子であったと理解できる。

加えて、この記述からは日本統治時代当時、現在見られる時間制限やチーム戦で行われている様子は見られず、人々が一斉にチャングーへと登る様子が記されている。そのため現在の規定からは、参加者全員が平等なルール下で参加し、安全性が考慮されていることが理解できよう。

また、現在のチャングーでは牛の油を木に塗り、登っていく際にわざと滑るような仕掛けが設けられている。この仕掛けは、1991年からルールとして追加されている。しかしながら、台湾が日本統治時代にあった1935年8月29日付の『臺灣日日新報』では、「命懸けの櫓登り」というタイトルで、当時のチャングーについて日本人記者が取材をした様子を記している。その中では当時、



写真1 日本統治下の時期に行われていたチャングーの新聞記事 (1935年8月29日『臺灣日日新報』より転載)

既に豚の油を使用していたと紹介されている。日本統治時代時点では、豚の油を使用していたこと、その後は1991年の再開後から牛の油を使用することになったのである。なお、この牛の油に関しては、エクストリームスポーツに関わる要素として重要な役割を果たしており、後に詳述する。

## 2 チャングーのルールについて

頭城チャングーの最大の目的は、約21メートル上空に取り付けられた旗、“順風旗”をチーム戦（頭城の場合は1チーム6人）で取り合うというものである。順風旗は、海上安全のお守りになると言われおり、かつては船舶関係者がこぞって順風旗を勝ち取った選手から買い求めたと言われる。その旗を取るには様々な障害があり、参加者はその障害と高所に登っていく恐怖に立ち向かわなければならない。下部には全長11mほどの福杉で作られた“棚柱（ポンジュ）”（以下、ポンジュと略す）に牛の油が塗られ、その上部に“孤棚（グーボン）”（以下、グーボンと略す）という木上の棚が取り付けられている。参加者は、ポンジュからグーボンに登りかえる際には、蹴上がりのような姿勢で登っていく必要がある。また、現在はグーボンに触れてから2分以内にグーボンの上へ立たなくてはならないというルールもある。グーボンにたどり着いた後も更に、“孤棧（グーザン）”

（以下、グーザンと略す）という竹製の塔に登る。そのグーザンには、供え物（鶏肉、豚肉、ビーフン、イカ、カモの肉、饅頭）が取り付けられており、その頂上に備え付けてある順風旗を目指す。また、グーボンにたどり着いてもそこからグーザンの上の順風旗まで5分以内に辿りつかなければ失格というルールもある。その為、参加者は油の塗られたポンジュ、21mの高所となるグーザンから落下しないように、なおかつスピーディーに登る必要がある。

上記の写真がチャングーの全体写真である。

## 3 鬼月に開催される意味

### 3.1 鬼月

チャングーは旧暦の7月に行われる活動であるが、旧暦の7月は“鬼月”と言われ、台湾にとって特別な意味を持つ1カ月間となっている。この月は冥界の孤魂（孤鬼、好兄弟、無縁仏）を饗応する月であるとされる。同月1日は“開鬼門”と呼ばれ、地獄の門が開き、人々は霊を迎え入れる。同月15日の中元節には、各家庭で祖先の霊の供養のため供え物を準備し、香をたく。霊は饗応を要求し、その要求に応えなければ祟りがあるが、逆に厚く饗応すれば、招福、平安、治病に靈験があると信じられてきた（可児、1976）。

また、台湾では道教信仰に加え、日本のお盆の由来の一つにあたる仏教の“盂蘭盆（うらぼん）”<sup>(3)</sup>がある。これは日本でのお盆と重なる部分がある。この時期になると先祖や無縁仏の霊（鬼）がこの世に戻ってくると言われる。“陰間”（いわば地獄）に住む鬼たちは、生前に悪事を働いたため裁きを受けている。台湾では7月のはじめに鬼門が開き、7月の終わりにその門が閉じるとされている。その期間であれば、霊は霊界とこの世を自由に移動ができる。悪事を働いた鬼たちもこの世に自由に來ることがで

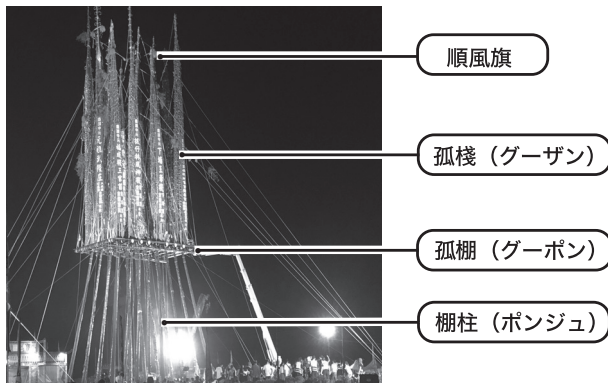


写真2 チャングーの全体と各部分の名称  
 (チャングーの下部にあるのが12本の棚柱“ポンジュ”)  
 (2019年8月29日 筆者撮影)

きるようになるため、人々は災いを避けるため、この時期にできるだけ海には近づかない、縁起の良いこと（結婚など）はできるだけ避けるようにと言い伝えられている。

この鬼月には台湾各地で宗教行事が行われる。台湾北部に位置する宜蘭県では“宜蘭水灯節”，宜蘭県の隣の基隆県で行われる“鷄籠中元祭”，台湾の南部の屏東県の“恆春搶孤・爬孤棚”などが代表される行事である。鬼月にそうした霊たちを歓迎するため、人々は家の玄関、店や会社の前で“普渡”と呼ばれる儀式を行う。“好兄弟（良い兄弟の意味）”と呼び無縁仏（鬼）たちにこの世を楽しんでもらうものである。“普渡”は旧暦7月1日から29、30日までであればいつでも行うことができる。

チャングーでは、この悪事を働いた鬼たちが関わってくる。チャングーは鬼門が閉められる最終日に行われる。そして、人間、鬼たちが共にチャングーに参加するとされる。鬼と人間たちの共存を望み、人間はチャングーに参加する鬼を尊敬することで、鬼門が閉まる最終日に、鬼に快く霊界に帰ってもらう、といった言い伝えもある。

### 3.2 中元節

台湾では、鬼月のちょうど中間に“中元節”がある。中元節とは道教をもととする年中行事の一つである。中華圏では、“三元”と言われ、旧暦1月15日の“上元”，旧暦7月15日の“中元”，旧暦10月15日の“下元”という。上元は天官大帝、中元は地官大帝、下元は水官大帝という神が誕生した日と意味づけられる。中元節は死者の罪が赦される日とされる。この日は靈魂が最も多く彷徨うため、鬼月の中で最も重要な一日になる。一般家庭やお店などの軒先に様々なお供えを並べ、線香を焚き靈魂を慰めるしきたりを行う。ちなみに、台湾最南部の恆春チャングーでは、普渡で供えられた供え物を皆で取り合うという意味合いが含ま

れるという。

鬼がこの鬼月に下界へ戻り、我々人間と共に過ごした後、人間を恨むことのないよう鬼を霊界へと戻す。そして、人々の安全と平和を願うというのがチャングーを行う意義とされているのである。

## V チャングーの実際

### ～2019年頭城チャングーより～

本稿では、2019年8月29日（旧暦では7月29日）に開催された頭城チャングーを通じて、従来までの祭事という捉え方には止まらず、スポーツ化していく様子を捉える。そうしたスポーツ化について、参加者および地域住民がどのような思いを抱いているのかをインタビューにより明らかにする。そこには、地域の活動として伝統の継承を重んじようとする住民と、地域外からスポーツとしてチャングーに挑む参加者との認識の違いが見て取れる。特に、近年の若者の参加といった動向には、エクストリームスポーツとしての極限状況や危険性があることから挑むという、従来までのスポーツ化には取まらない特徴をチャングーは有していることがわかる。

### 1 開催場所

本研究の調査地は、台湾の東北部にある宜蘭県にある頭城鎮（鎮とは郷級行政区を表す）である。台北からは高速道路を使い車で1時間ほど、台湾鉄道でも1時間30分ほどの場所にある。

この頭城でのチャングー発展の起源は、蘭陽平原の開拓と密接に関連していると言われる。頭城を含む蘭陽平原は、台湾でも漢民族の開拓が比較的早かった地域とされている。そのことから、チャングーの儀式の形成過程には先人たちによる台湾開拓の苦難の日々が反映されており、無縁仏の供養や先祖の追悼といった宗教的意味が込められているという（臺灣宗教百景、2019/10/26）。



その頭城で、チャングーは、市街地からやや南東の“頭城搶孤場”で行われる。頭城はここ宜蘭県でも比較的開拓の早かった地であり、疫病、原住民との争いという歴史が影響し、チャングーが頭城で行われるようになったという。しかし、頭城搶孤場で行われるようになった明確な理由は管見の限り定かではない。頭城搶孤場は、空き地の一角にあり、鉄道駅から徒歩約15分程度の場所になる。

## 2 当日のスケジュール

2019年のチャングーは、8月29日（旧暦7月29日）に頭城搶孤場で開催された。台湾鉄道の駅にも近く交通の便も良い場所である。

チャングーは、行事の最後のメインイベントとして位置づけられており、当日のスケジュールは下記の表1の通りになっている（蘭陽資訊網, 2020/04/26）。22時から選手入場となっていたが、前日から設営される屋台が会場の入り口に並び立ち、人々はそれらの屋台で軽食を取ったり、台湾オペラやダンス、各種公演等を楽しみながら過ごしていた。チャングーが始まる頃には、おおよそ3,000人を数える観客が来場していたという（聯合新聞網, 2020/04/27）。選手入場時には、昨年

表1 チャングー開催当日スケジュール

8月29日 旧暦7月29日 行事	7:00	チャングーにグーザンを吊り下げる
	10:00	祈祷
	19:00	台湾オペラ
	20:00	地元の蘭陽ダンスクラブによる公演
	21:30	孤棧の下部に線香と包子を備える
	21:40	大士爺（仏教、道教の神）を祭る
	22:00	選手入場
	22:20	開会宣言
	22:45	選手紹介
	23:00	飯朋（ファンボン）開始
	23:15	搶孤（チャングー）開始

（参考：蘭陽資訊網）

の結果や今年の注目チームのアナウンス後、選手紹介があった。

なお、競技全体が終了したのは午前0時にほど近い時間であり、規定の0時の制限時間を過ぎずに終わった。

## 3 チャングーに関わる行事

### 3.1 放水燈（ファンシュイダン）

まず、チャングーが行われる前日の夜20時頃から、“放水燈”（以下、ファンシュイダン）という活動が行われる。ファンシュイダンとは所謂、灯籠流しのようなものである。場所は頭城から2キロほど離れた竹安河口という川沿いになる。ファンシュイダンのモチーフは家の形をしており、高さは約30～100cmの灯籠である。中には死後の世界のお金とされる紙が入れている。紙には衣服や櫛、靴などが描かれており、死後の世界でも先祖がお金に困らぬよう灯籠と一緒に燃やして先祖に届けるという。儀式は清朝の時代から台湾語で行われてきており、その名残で現在も台湾語が使用されている。

祈祷が終わると竹安河口へ移動し、ファンシュイダンを流し始める。男性が神輿の様な形でファンシュイダンを担ぎ、そのまま共に川へ入水する。ファンシュイダンが水上で安定すると火をつけ、川に流す。すべての灯籠が流し終わったあと、21時半ごろにフィナーレを知らせる打ち上げ花火が上げられ終了となった。

### 3.2 飯朋（ファンボン）

チャングーが行われる直前には、“飯朋（ファンボン）”（以下、ファンボン）が行われる。このファンボンはいわばチャングーの前座として行われるイベントである。ファンボンはチーム戦ではなく個人戦で10人まで参加できる。ここではチャングーの参加者とは別の選手が出場する。2019年は、台湾の参加者のほかにアメリカ、フランス

から各1名ずつの参加者がいた。ファンポン自体の高さは全長11メートルほどで、下から福杉で作られた10本のボンジュ、その上にある柵のファンポン、その上部に1本の“飯棧（ファンザン）”がある（以下、カタカナに記す）。

競争自体はファンザンの下部にある柵のファンポンに置かれている順風旗を取れば勝利である。その後、メインイベントであるチャングーが催されることになる。

### 3.3 参加条件ならびに慣習

チャングー、ファンポンの参加資格は同じで、20歳以上で国籍は不問、心身健康で高所に耐えることができ、心臓病など大きな病気がない人、6人1組のチームでの参加が義務づけられている（1人はリーダーで登ることはできないので、登るのは5人）。また、このチャングーの参加に際して様々な禁止事項が存在する。一つは女人禁制である。チャングーの周りにはフェンスがあり、その中には女性が入ることすら禁じられている。なお、参加者の妻が出産後1か月以内であれば、その場合も出場は禁止される。参加者に関しては、出場の際は身につける衣服もすべて新しいものを身につける決まりもある。また、競技後には一切のインタビューに答えることはできない。これはチャングーの間に鬼との関係が密接になる為、競技後はお祓いが終わるまでは参加者に近づくことが許されない為である。

### 3.4 参加人数とチーム構成

2019年は全部で12チームの参加があり、参加人数はのべ72名であった。チーム名はそれぞれ、羅東鎮公所隊、恆春觀林寺隊、杏國隊、羅東鎮公所B隊、羅東鎮公所A隊、光陽明慧車業隊、杏輝隊、恆春鎮公所隊、印尼隊、時代力量隊、滿州體育會隊、冬山郷公所隊の合計12チームが参加した。その内、印尼隊はインドネシア人のチームである。

### 3.5 時間制限と賞金

近年、チャングーの競争性は増していることが、時間制限および賞金制度を見ることで、その傾向がわかる。既述の頭城チャングーの規定のように、現在、チャングーには登るための制限時間が設けられている。2019年に筆者がチャングーの調査に参加した際には、制限時間が一昨年、昨年よりも短く設定されている旨、場内アナウンスがあった。これはチャングーに登る難易度を上げていると捉えることができる。また、調査時に参加者らはボンジュからグーポンに登り変える鼠返しのような地点の攻略に苦慮し、蹴上がりのような動作を繰り返し試みていたが、ここで時間制限となり失格になる参加者も何人か見受けられた。参加者はボンジュに登っていく時点で相当な体力を奪われているように映る。そうした状況を観客も十分理解しており、参加者がグーポンを超えるごとに観客からは大きな声援が送られていた。

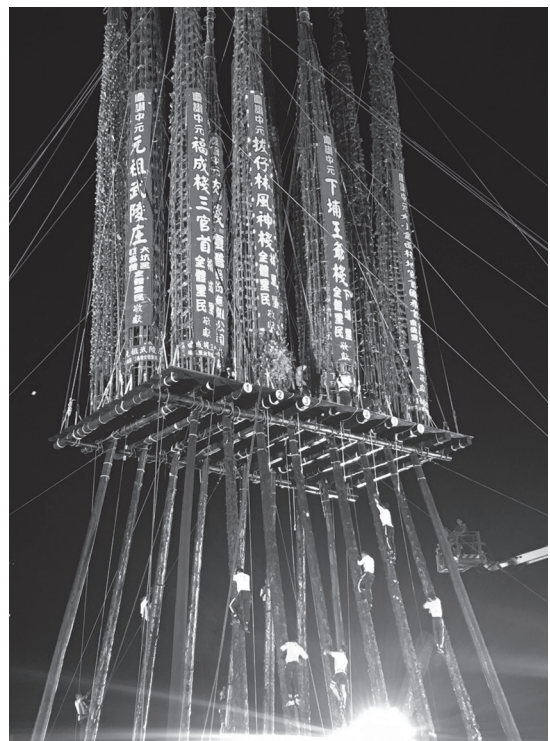


写真3 チャングーの競技風景

(2019年8月29日 筆者撮影)

後述のインタビューの内容からもわかるように、こうした時間制限を設けることや賞金制度も導入されたことにより、競争性は以前よりも激しくなっているという。ちなみに、この年の賞金は、最高33万台湾ドル（日本円で約120万円ほど）になっており、2019年の大会は羅東鎮公所A隊が優勝し賞金を獲得した。

#### IV チャングーのスポーツ化

ここではチャングーのスポーツ化について論じていきたい。記述のように、チャングーはこれまでの宗教あるいは文化活動を主軸として、それに付随するように行われてきた。しかし、現在はスポーツとして捉えられる側面を多分に有する。ここでは、先行研究および文献や史資料に加え、現地調査での聞き取りを基に考察を試みた。

なお、調査は2019年頭城搶孤当日に実施し、参加者およびボランティアから聞き取りを行った。また、2020年7月には頭城チャングーを統括している行政（頭城鎮公所）の、宜蘭県頭城鎮中元恆春鎮公所祭典協会内の職員からの聞き取り調査を実施した。下記に、主たる調査対象者3名について記した。

- ①参加者（25歳男性）：恆春觀林寺隊のメンバー、3年前から活動に参加。
- ②大会ボランティア（60歳代女性）：現地での運営に関わる。宜蘭県頭城の出身、ほぼ毎回ボランティアもしくは観客として関わっている。今回はボランティアとして観客への整理券の配布、会場案内係。先祖から日本の植民地統治下に行われていたチャングーを伝え聞いている。また戒厳令での中断期以前の姿についても地域に暮らす人々から聞いた覚えがあるという。
- ③協会職員（50歳代女性）：宜蘭県頭城鎮中元恆春鎮公所祭典協会の職員。2007年から宜蘭県

頭城鎮中元恆春鎮公所祭典協会に勤務。運営に向けた連絡や当日の運営係として2007年より従事。2007年以前については詳細を知らない。

以下、インタビュー内容記述の際は、（著＝著者、①＝参加者、②＝ボランティア、③＝協会の職員）と略す。

##### 1 インタビュー

ボランティアは、依然としてチャングーを宗教、文化活動と捉えており、“スポーツではない”と断言している。しかしながら、昨今の若者たちの参加者や規定の変更などから、“スポーツのようになってきている”という認識を語っている。

一方で参加者は、文化活動としても認識しつつも、やはり勝負が関わりと競技性に偏った考え方をする傾向にある。また協会職員は、その立場や役割もあることから、宗教・文化活動としての側面とスポーツとしての側面の両側面について、それぞれの理由を分析するように語っている。しかし、ボランティアと同様に協会職員についても、まずは宗教的な文化活動であり、そのための一連の儀式についても重んじるべきであるとの考えを持つことがインタビューの語りからもわかる。

以下は、それぞれのインタビューにおいて、関連する部分のみを示している。

著：このチャングーはあなたにとってスポーツだと思いますか？ それとも文化活動だと思いますか？

①：このチャングーに関しては、自分はスポーツだと思っている。選手たち（チームメイト達）もスポーツとして捉えている人が多い。

著：では、エクストリームスポーツのような危険なスポーツの一種と捉えてもいいですか？

①：はい。自分は“エクストリームスポーツ”の一種と思う。

また、同じような質問をボランティアにもしたところ、以下のように語る。

著：チャングーはスポーツと思いますか？

②：スポーツではないと思う。これは文化的な儀式だと思う。お祭り。選手、観客、運営側の連帯も必要。スポーツというよりも人の団結や鬼を尊敬する儀式だと思う。鬼が人間に災いをもたらさないように祈願する。チャングーでは観客も一緒に会場を盛り上げる。鬼（神）とも一緒になって大会を盛り上げる。しかし、現在はスポーツと思っている人が増えてきている。以前は、私たちは宗教活動、文化的な活動と思っていたが、以前はなかったルール（牛の油、制限時間）や賞金が出るようになり、体力も必要になったし、スポーツの要素が増えてきた。その影響もあって台湾全土から人も集まり、雰囲気もスポーツっぽくなってきた。だから若い人はスポーツと考えている人が多いと思う。

ボランティアは、スポーツと捉えてきている人が増えていることを理解しながらも、依然としてチャングーは宗教・文化的な儀式と捉えている。チャングーでの鬼の存在とその重要性についても語っており、その神聖な文化活動としての面を強調していることがわかる。

また、同じような質問を協会の職員にもしたところ、以下の様に語る。

著：宜蘭県頭城鎮中元恆春鎮公所祭典協会としても、チャングーは宗教・文化活動とみていますか？

①：はい。もちろん、中元節の一つのイベントであり、宗教・文化活動です。しかし、近年は地元、年配の方以外、特に若者はスポーツとして捉えている人が増えてきています。

著：そのスポーツとして捉えられてきている要因というのはなんでしょうか。

③：やはり、スポーツのようなルールが増えてきたということだと思います。チーム戦や、体力が必要であること、テクニック（蹴上がり）の様な態勢になること等）が必要になってきたことだと思います。登っていく難しさがスポーツとも関連していて、それも、スポーツとして捉えられてきている要因になっていると思います。あとは、メディアの関連もあると思います。毎回、チャングーはテレビの生放送がされますが、それはチャングーに登るときだけに撮影がされます。なので、視聴者はチャングーの宗教・文化的な部分を見ることができないんです。なので、視聴者のほとんどの人はスポーツとして捉えてもおかしくないと思います。

著：以前、参加者にもインタビューをしたのですが、その時、その方も“エクストリームスポーツ”のようなものだと言っていました。そのように考えてきている人は増えてきているのでしょうか？

③：はい。増えてきていますね。やっぱり危険度もある、注目度があるといった部分も、その要因になっていると思います。

チャングーを宗教・文化と捉えるのか、スポーツとして捉えるのかに関しては、ボランティア女性のように、以前のチャングーの様子を伝え聞いていることも影響してくるだろう。実際に彼女は、先祖の代から頭城地区に住み続けており、以前のチャングーについても伝え聞いていると語っていた。そのことから、彼女にとってチャングーは宗教・文化活動としてのイメージが強く刻まれているとみてよい。

また、協会職員に関しては、チャングーが見方によっては、宗教・文化的意味合いよりも、スポ



ーツとして捉えられてきているという現状を認めつつ、宗教・文化活動の部分を強調していることがインタビューを通して理解できる。

一方で、参加者のような若者にとっては、年々、厳しくなる時間制限や、賞金などの要因から、完全にスポーツとして認識をしていることがわかる。また、危険を伴うエクストリームスポーツの一種とも捉えている。

こうしたチャングーのスポーツ化の一つの要素として考えられるのは、参加者や協会職員の語りにあるように、ルールの変化であったり、メディアでの宗教的活動や儀式を省き、チャングーのみにクローズアップした映し方などがあげられる。

## 2 参加要項の変化にみるスポーツ化

現在のチャングーにおいては、平等性を確保するためにルールが定められており、時に変更が加えられてきた。その一つに、参加者に同じロープを使用すること、スパイク付きの靴の使用禁止、登山用具の使用禁止が参加要項に記載されていることがあげられる。また、他の参加者に妨害行為を加えることについては、厳格に禁止されている。加えて、開始の合図の後、7分以内にチームの一人もポンジュを登ることができなければ、そのチーム全体が失格になると定められている。

参加要項には、次のように平等性を重視するような文言が記されている。

### 参加要項 26 条より

原文：

“各參賽隊伍應服從大會裁判之判決，並嚴守運動員之精神，嚴禁隊伍間之言語衝突，挑釁，否則視同取消比賽資格。比賽若有爭議，應於大會比賽期間，由該隊領隊向大會裁判長提出聲明異議，由裁判組予以審核裁判之，非有重大不可抗拒之理由，比賽不得中斷。若比賽出現爭議，於比賽該日無法判定，參賽隊伍得於比賽結束後 20 分鐘內，以書

面向大會提出申請，並繳交申訴保證金一萬元，依重大影響名次處理辦法處理，由評議小組定奪之，結果不得聲明異議。”（傍点は著者による加筆）

「参加するすべてのチームは、大会審判の判定に従い、アスリートの精神を厳守する必要がある。チーム間の口頭での対立や挑発は固く禁じられている。違反した場合、失格と見なされる。競技会で争議が生じた場合、チームリーダーは競技会中に主任審判に異議を唱え、審判団は審査を行い、大きな理由がない限り、競技は中断されないものとする。大会当日に紛争が発生し、当日、判定できない場合、参加チームは、大会終了後 20 分以内に書面で大会に申請書と共にそれに 1 万円の保証金を提出する必要がある。ルールにより、裁定委員会が決定した場合、結果に異議を唱えることはできない。」

ここで注目すべき点は、「嚴守運動員之精神」とあるように、参加者はアスリートであることが前提とされ、他のチームへの妨害や反則行為が厳重に禁止されていることを明示する。また、審判員の存在や、アスリート精神としての精神を保つための挑発行為の禁止等も記されており、いわゆる競技スポーツの規定と同様な要項の項目となっていることがわかる。

前述のように、近年は外国人の参加により、国際スポーツとしての要素も見取れる。現行では、参加者は台湾人に制限されることなく、世界中から参加する機会が平等に与えられている。国内外の参加者が共通して持ちうるスポーツにおけるアスリートの精神性を活用し、競技スポーツで重んじられている平等性、公平性についてもここまで明記されていることを考えれば、すでに運営する組織自体がチャングーをスポーツとしてみなしている側面もあると理解することができよう。

## VII エクストリームスポーツとしてのチャングー

ここまで、チャングーはスポーツとして捉えられる現状について述べてきた。しかし、現状を鑑みればチャングーが若者を中心に参加者の増加がみられることを、単なるスポーツ化だけでは説明しきれない側面がある。チャングーの魅力は、油の塗られた柱に必死にしがみつきながら、高所の先端近くまでぶるぶると痙攣する筋肉を駆使して、登りきる点にあるのだが、高所に向けての闘いは同時に落下への恐怖をもたらす他に類を見ない極限状況にある。このような“極限性”を競うチャングーを、若者たちは“エクストリームスポーツ”として認識しているのである。

以下では、チャングーのエクストリームスポーツとしての要素について検討し、外見は従来までの伝統スポーツという殻を纏いながらも、新規性について若者たちの新たな眼差しからその魅力があぶりだされているチャングーの構造について論じていきたい。

### 1 極限集中状態

現在、特に若者にとってチャングーはスポーツとして見られだしてきているということは、すでに述べた。それに加え、参加者はチャングーに危険を有するという点に言及する。

参加者は、次のように述べる。

①：自分は、チャングーは、危険を有するような“エクストリームスポーツ”の一種と思う。

彼にとってチャングーは伝統的な宗教、文化行事ではなく、エクストリームスポーツであると断言する。エクストリームスポーツとして捉えている背景には、彼が言うように「危険性を有する」

ということが一番の理由と挙げている。

エクストリームスポーツやその類のスポーツでは、危険性を有することから、リスクスポーツとも表現されてきたように、危険かつ極限的な側面が最たる特徴とされている(阿部,2012)。また、エクストリームスポーツにおいては、コトラ(2015)が、担い手は、高い集中状態(フロー)に入る可能性が高いことを述べている。エクストリームスポーツにおいても、危険に身をさらす場面では高い集中状態を経験することが見られる。その実践者は若く、極限状態を求めるような人々が行っているであろう。

チャングー参加者は次のように述べる。

著：この競技で登っていくことに関して、怖いと思いますか？

①：あまり思わない。

著：この競技をしているときに極限集中状態に入ることはありますか？

①：登っていくときは極限集中状態に入る。

著：周りの音とかが聞こえなくなったりしますか？

①：そう。集中しているので、登ることだけ考えている。

参加者が言うように、彼自身もチャングーでの危険を伴う高い集中状態を経験している。これは、コトラ(2015)のいうエクストリームスポーツの実践者の経験とも合致する極限集中状態といえよう。既述のように、チャングーではこれまでに死亡事故も起きており、中止も余儀なくされたという歴史もある。現在、チャングーの下部には安全網は設置されているが、誤って落下してしまった際は、ポンジュの最も高い地点である地上10メートルほどから落ちることになるため、それに相当する危険が伴う。その為、参加者たちは、高所へと登る危険と恐怖は当然のことながら感じ

ているだろう。しかしながら、一方でそうしたリスクと恐怖を克服するという極限集中状態こそが実践者たちを魅了する要素なのである。

その極限集中状態は、コトラー(2015)が著書で触れているチクセントミハイの“フロー”からも捉えることができる。コトラーは、エクストリームスポーツの実践者はたびたびフローを体験するということを著書で明らかにしており、極限状況下でフローを経験することで幸福感が得られるということを述べる。さらに、その極限集中状態を経験するべく、「自らリスクを冒し〈生〉と〈死〉の裂け目(edge)で展開される人間の営みを解明するための概念」(根上, 2009, 196)と言われる“エッジワーク”という概念もある。そのエッジワークはLyng(1990)によって、スカイダイビングなどのエクストリームスポーツに注目し研究が進められてきた。これらの概念からわかることは、おおよそ極限状況下に置かれた際に実践者が経験する状態やその危険へ挑む動機を示している。危険や時に死に直面しながらも普段の生活では体験できないスリルを味わう。その状況下では、快楽や楽しさ、爽快感や幸福感を体感できると言われており、実践者はその魅力に吸い付けられるようにして参加するとも言われる。極限集中状態において経験する“楽しさ”が実践者を魅了しているのである。

上述からも、極限集中状態を楽しむという要素はチャングーとエクストリームスポーツとの特筆すべき共通点と捉えることができるだろう。

## 2 既定路線からの逸脱性 “ハミ出し”

チャングーに関しては、近年、記録を重視したようなルールが設けられるとともに、登っていく際に難易度を上げるような仕掛けが施されている。それは、牛の油を柱に塗ることで登りにくくさせる障害という仕掛けで、1991年からルールとして追加されたというのが、かつて台湾が日本統

治時代にあった1935年8月29日付の『臺灣日日新報』では、「命懸けの樽登り」というタイトルで当時のチャングーについての記載があり(写真1を参考)、すでに豚の油を使用していたと紹介されている。いつ柱に油が塗られるようになったのか、またその詳細は、今後明確にしていかなければならない。

いずれにせよ、油が塗られていることによって、参加者は登っていく際に滑らないように登る必要がある。また、滑ることで順位の変動が激化したりと、非効率な競争だともいえる。

協会職員もこの牛の油の存在について次のように述べる。

③：牛の油というルールの追加は、時間をより長くかけて登っていく点と、難易度をあげるようなゲーム性。

国際スポーツの流れから考えれば、勝敗に決着をつける時間は往々にして短くされる傾向にある。なるべく無駄な時間を省き、合理的に勝敗を決する。メディアとの関わりにおいて、それはよりスポーツに求められるようになった。こうした傾向から考えると、チャングーにおける柱への油の塗布は、勝敗をわかりやすく端的に示そうとする合理的発想とはいえ、むしろ非合理的と捉えられよう。つまり、国際スポーツが求めるような既定路線の合理的な勝敗を決する競争という点からは、逸脱、“ハミ出し”ていく方向性にあるといえる。国際スポーツでは効率性が求められるが、チャングーではあえて予測不能な時間をかけるゲーム性を優先させるのである。

加えて、エクストリームスポーツにおいては、評価に関しても国際スポーツが求める精神からハミ出している点がある。2018年に行われた平昌オリンピックでは、スノーボードの解説で、元ハーフパイプ日本代表、中井孝治氏の独特な表現が

話題を呼んだ。それは“カッコいい”、“おしゃれ”、“スタイリッシュ”という表現である。このような表現はエクストリームスポーツが重要視している独創性という特性を表している。実際に、採点でもそのような独創性は評価ポイントとなる（『日刊スポーツ』2018.2.13）と言う。例えば平昌オリンピックのスノーボードの評価の方法としては、それぞれの技の高さ、難易度、完成度のほか、多様性、全体の流れも採点され、選手の発想力が評価のポイントとされている。また、技術的に高度な滑りをしたとしても、総合的に“カッコいい”選手のほうが得点は高くなることがあると元プロスノーボーダーの青木亮は答える（『ライブドアニュース』2018.2.14）。選手自身は技を見せるときに型ハマらない、独創性のある表現を追求しているのである。

チャングーにおいても、エクストリームスポーツと同様に、参加者に対してカッコいい、勇敢であるという印象を持っていることが、ボランティアの聞き取りから見て取れる。

著：選手に対してはどう思いますか？

②：英雄みたいな存在。体力がある、勇敢で肝がある。かっこよくて、恐れず登っていく気持ちを尊敬している。

以上のように、チャングーが柱に油を塗布するようなゲーム性を採用し、非効率な競争にしている、また競技者に対するカッコよさや勇敢さを評価する点においても、国際スポーツとは一線を画すエクストリームスポーツと類似する点を有していることがわかる。

### 3 アクシデントを楽しむ演出

チャングーのエクストリームスポーツとの共通点は、順位を予測不能にさせるアクシデントを誘発させる点である。これまで論じてきた油の柱へ

の塗布という仕掛けは、ゲーム性が増幅する。そしてそれはまた、チャングーにおける想定外の出来事、つまりここでいうアクシデントを生じさせることが、ゲーム性の面白さとなるのである。かなりの時間をかけて登り、ヌルヌルとした柱を登る競技者の順位は目まぐるしく入れ替わる。龍(2012,71)も、チャングーには「高いリスクとスリリング」な要素があると指摘する。こうした点について、協会職員からの聞き取りでも、牛の油というルールへの追加は、「時間をより長くかけて登っていく点と、難易度が上がっていくのはゲーム性」を生み出しており、チャングーの難易度、ゲーム性を高めるための一つの仕掛けになっている。このことは、競技者だけでなく観客をも楽しませる演出になっている。

エクストリームスポーツでも、アクシデントを楽しむような演出は多々見受けられる。例えば、“レッドブル・クラッシュドアイス”に見られる、氷上の番狂わせがそうであろう。レッドブル・クラッシュドアイスとは、2018年より日本でも行われるようになったレッドブルが主催する氷上のエクストリームスポーツである。約600mの氷の敷かれた、アップダウン、段差やカーブなどがあるコースを、4人でひしめき合い滑り降りる。競技は、接地面が小さいブレードで滑るため、ほんのわずかなミスでも取り返しのつかない転倒になる。そのような状況下ではゴールの寸前で転倒し、負けてしまうケースは少なくない。それこそ、何が起こるかがわからない、スリリングで最後まで決着もわからない側面は、アクシデント性がこの種目の醍醐味であるといえる。

油の柱への塗布を施すチャングーとクラッシュドアイスという氷上競技は、どちらも番狂わせやハプニングは織り込み済みであり、むしろそうしたアクシデントを楽しむ演出が随所に施されている。アクシデント要素を楽しむ競技者と観客の存在という点において、チャングーがエクストリー



ムスポーツの共通点を有しているといえるのである。

#### 4 宗教とスピリチュアル

そもそもチャングーは、道教の行事に組み込まれた活動であることはすでに述べた。チャングーの本来の意味合いは、死者への供養のために行われてきたとされるのである。そのことは、ボランティアへの聞き取りの際も、チャングーは道教における一つの行事であることが次のように述べられている。

②：チャングーは文化的な儀式だと思う。お祭り。選手、観客、運営側の連帯も必要。スポーツというよりも人の団結や鬼を尊敬する儀式だと思う。鬼が人間に災いをもたらさないように祈願する。チャングーでは観客も一緒に会場を盛り上げる。鬼とも一緒になって大会を盛り上げる。

このように、チャングーは災いをもたらす目には見えない鬼と人間が共にチャングーに挑む、と理解されている。具体的には、鬼が下界に出入りできるという鬼月の意味合いだけでなく、高所に登っていくという危険性を伴う身体活動のなかで、参加者は極限集中状態を経験する。こうした感覚は、まさに宗教（神）やスピリチュアルなものとの関わりに繋がる経験と捉えることができるのではないだろうか。

極限集中状態は、既述している“フロー”に加えて、“トランス状態”とも表現される。それは自我を卓越したある種の神がかった状態として、通常とは異なる意識の状態を示し、そうした状況下では、高い幸福感や高揚感が得られると言われる。神秘的かつ、スピリチュアルな世界と極限集中状態には、少なからず親和性があると考えられる。

エクストリームスポーツにおいても、極限集中状態とスピリチュアル世界との関わりという点が強調されて論じられている。Booth & Thorpe (2007) の『Berkshire encyclopedia of extreme sports』では、エクストリームスポーツでは、実践者がたびたび“超越的でスピリチュアル”な経験をすると述べる。エクストリームスポーツの実践者は自ら危険やリスクを求めることで、自然と完全に一体化したような感覚をも得るといふ。そういった感覚を引き起こす要素としては、1. 通常の自己の限界（肉体的、精神的）を越えるため、2. 潜在的に危機的状況を避けるため、3. 自分の存在感や幻想的なものと繋がりを感じるため、以上のような3点から超越的な体験を引き起こすという（前掲：305）。

また同書では、そのような体験自体を“禅”や“悟り”など、仏教の概念と同一視する傾向もあると論じている。

特に、エクストリームスポーツの一つと言われるサーフィンでは、宗教との関わりを示している側面を多分に有する。Taylor (2007) は多くのサーファーにとって、サーフィンは物理的、心理的、精神的な利益をもたらすとして、宗教的側面を有したものと捉えられ発展してきたという。そのスピリチュアルな部分を尊重するようなサーファーを「ソウルサーファー」と呼び、インタビューや雑誌等から分析をしている。Taylor はサーフィンの精神に、アジアの宗教やアブラハムの宗教を混ぜ合わせているようなサーファーもいることを述べる。サーフィンに含まれる精神性は、Melekian (2005) も一つの宗教として機能してもおかしくないとも主張する。この論文において、宗教的な部分は「スピリチュアル」という言葉を多用して説明している。スピリチュアルとは、ラテン語の“spiritus”に由来するキリスト教用語であり、“霊的であること、靈魂に関する”といった意味を持つ。英語でも、“宗教的・精神的な物事、霊の、

魂の、精神の、超自然的”などを意味する。サーフィンにおいては、特に超自然という、人間の力では変えられない波に乗ることがスピリチュアルとつながりを持つのであろう。

サーフィンのように、海や山など、自然の中で行われるエクストリームスポーツは多い。海や山に宿る神秘性や祟りなども信じられている部分がある。チャングーでは、宗教行事として行われてきたことで、鬼とともに参加すると言い伝えられている。そういった宗教的な見方に極限状態に伴った高い集中状態が、神秘的な感覚や幸福感を経験しているのではないだろうか。そして、目には見えない恐怖や力に立ち向かうのであろう。

道教の行事として行われてきたチャングーには、日常の禍を鬼と表現しながらも人間がおもてなしをするという意味合いが包含されている。チャングーでは鬼とともに楽しむことで機嫌よく鬼がものと居場所に戻る、という地域の伝統的な価値観を継承している。実際に競技とみれば、高所に登っていくという危険性を孕む行為ではあるが、極限集中状態を楽しむ、つまり恐怖と喜びという二律背反を含んだ身体経験を支える精神性は、記述のようなエクストリームスポーツでも経験しうるスピリチュアルな精神性とも相通する点なのかもしれない。

## VIII おわりに

本論文では、チャングーが宗教、文化的な活動として捉えられている側面に加え、スポーツ化、さらに“エクストリームスポーツ”として捉えられている側面に着目した。

聞き取りからは、現在行われているチャングーが本来の宗教的および地域の文化活動であり、また競争性という観点からはスポーツ化の側面も併せ持つことがわかる。これまでの伝統スポーツでいえば、特定の地域に閉じ込められたコードを有

しながら、その文化的な価値をいかに継承していくか、といった“まなざし”が向けられることが多かった。しかし、本論文で明らかにしたような、チャングーに見るエクストリームスポーツと共通する特徴があり、参加者や観客の認識も変化していることが明らかになった。

本論文で指摘した共通点、すなわち、“危険性をも楽しむ極限集中状態”、“既定路線からの逸脱性”、“アクシデントを楽しむ演出”、“宗教とスピリチュアル”は、チャングーだけでなく、これまでもいくつかの伝統スポーツにも内在してきた要素である。伝統スポーツという、“まなざし”からは見出されにくかった面白みが、今を生きる若者たちによって、エクストリームスポーツとしての新規性が見出されたと捉えることができよう。

インタビューにあったように、現在チャングーは、そのルールの変容も伴って宗教・文化活動としての面と競技スポーツの面が見られる。この点については、すでに先行研究でも指摘されてきた部分もある。しかし、本論では、そうした競技スポーツ化という特徴に加え、エクストリームスポーツの要素も併せ持つとして、参加者や担い手たちの認識も変化していることが明らかになった。近年、レッドブルがオンラインサイトで、長野県諏訪市で行われる“御柱祭”を「日本最古のエクストリームイベント」と称し、映像を紹介した。同様に、世界各地の伝統行事の映像を配信する動きがみられる。これまでの伝統スポーツという概念ではなく、若者の支持を受けるレッドブルをも開拓するエクストリームスポーツ、つまり究極かつ極限である点に注目した映像配信である。これまでのスポーツの概念を打破するかのごとく、メディアコンテンツを次々と配信するレッドブルの新たな伝統スポーツへの“まなざし”は、伝統スポーツの概念をも変容させる影響力を持ち始めている。もはや、そうしたまなざしにより開拓された伝統スポーツを、“New Traditional Sport”と表

現すべき、新たなジャンルの創造と位置付けておきたい。今後は、その New Traditional Sport の概念化を進めていくことで、伝統スポーツ研究にも新たな理論モデルを提示できる可能性があると考えられる。

#### 【注】

- (1) 張志堅 (1995) …張志堅, 『超越巔峰 - 頭城搶孤』(國民體育季刊第二十四卷第三期 1995年9月) 頁 59-60. この論文は台湾現地で論文検索サイト等、管見の限り見られなかったため、許 (2010) の論文から引用した。
- (2) 劉銘傳…清末の軍人であり政治家。台湾省の初代巡撫に任命後、台湾のインフラ等を整備し、後の台湾発展の基礎を築いた人物。
- (3) 孟蘭盆…祖先の霊を祭る仏事。日本では基本的に地方や宗教によって異なるが、7月13日～16日又は8月に行われる。先祖の霊を自宅にお迎えすることから始まる。先祖の滞り場所の準備として、盆棚を組み、初物の果物などのお供え物や盆花を飾る。地域によっては海や川に灯籠流し、精霊流しなどの風習もある。

#### 【文献】

- 阿部生雄・寺島善一・森川貞夫 (2012) スポーツの世界地図。丸善出版株式会社。
- Beal, B. (1995) Disqualifying the official: An exploration of social resistance through the subculture of skateboarding. *Sociology of Sport Journal*, 12(3): 252-267.
- Booth, D. & Thorpe, H. (2007). *Berkshire encyclopedia of extreme sports*. Berkshire Publishing Group.
- グットマン・アレン (1997) スポーツと帝国：近代スポーツと文化帝国主義 (谷川稔・石井昌幸・池田恵子・石井芳枝訳)。昭和堂。
- 可児弘明 (1976) 農曆七月の台湾農村 (公普、搶孤)：民衆道教の周辺 (その五)。史学。47(3): 45-213.
- 菊幸一 (2015) 科学技術の開発の影響とスポーツの課題 中村敏雄・高橋健夫・寒川恒夫・友添秀則編, 21世紀スポーツ大辞典。大修館書店：903
- 金湘斌 (2000) 従民俗體育觀點談恆春搶孤活動的過去, 現在與未來。國立高雄師範大學體育學系學會, 1: 91-95, 96-97
- Kusz, K. (2007). Revolt of the white athlete: Race, media and the emergence of extreme athletes in America (Vol. 14). Peter Lang.
- コトラー・スティーン (2015) 超人の秘密—エクストリームスポーツとフロー体験—(熊谷玲美訳)。早川書房：11-17
- Lyng, S. (1990). Edgework: A social psychological analysis of voluntary risk taking. *American journal of sociology*, 95(4), 851-886.
- 林正芳・邱彦貴・劉俊廷・姚伯勳・陳詠笙 (2011) 『頭城搶孤：歴史、祭典與工藝』蘭博研究。宜蘭縣立蘭陽博物館。
- Melekian, B. (2005). Is God a Goofyfoot? If So, Surfing May Be the Next World Religion. *Surfer* 46/3 (online).
- 水野英莉 (2015) 日本におけるサーフィンをする女性の50年 (1) —1990年代以降のサーフィン文化とジェンダー公平—。流通科学大学編集 人間・社会・自然編 . 8(1): 53-76.
- 根上優 (2009) エッジワークの社会学—人はなぜリスクを冒すのか—。高桑和巳編, 生き延びること—生命の教養学V。慶應義塾大学出版会：195-231
- 龍炳峰 (2012) Taiwan Qianggu Huodong Lishi Fazhan Yu Quanli, 84 Selina Ching CHAN Xingbie zhi Tantai (臺灣搶孤活動歷史發展與權力, 性別之探討) (The History Development of Chiang-Ku Festival and the Exploration of Gender and Power). *Taiwan Journal of Sports Scholarly Research* 52, 51-80.
- 鈴木直文 (2017) 「オルタナティブスポーツ」とは何か。一橋大学スポーツ研究。36:11-18.
- 鈴木清一郎 (1934) 臺灣舊慣冠婚葬祭と年中行事。臺灣日日新報社。
- Taylor, B. (2007). Surfing into spirituality and a new, aquatic nature religion. *Journal of the American Academy of Religion*, 75(4): 923-951.
- Thorpe, H. and Wheaton, B. (2011) 'Generation X Games' action sports and the Olympic Movement: Understanding the cultural politics of incorporation. *Sociology*, 45(5): 830-847.
- Thorpe, H. (2013) Transnational Mobilities in Action Sport Cultures: 4-5
- Wheaton, B. (2004) *Understanding Lifestyle Sports: Consumption, Identity and Difference*. Oxford: Routledge.
- Wheaton, B. (2013) *The cultural politics of lifestyle sports*. Routledge.
- 許澤耀 (2010) 從神聖到世俗—以頭城搶孤為例。台北市：國立台灣師範大學台灣文化及語言文學研究所碩士學位班在職進修專班碩士論文。
- 山本敦久 (2013) 「横乗り文化」と変容するライフスタイル：スノーボード文化の社会的考察。成城・経済研究, 202
- 游錫堃 (1992) (序文) 收錄於《頭城搶孤》宜蘭：頭城中元祭典委員會。

#### 【新聞記事・Web サイト】

- 文化部 iCulture (2020) 頭城搶孤民俗文化活動 <https://cloud.culture.tw/frontsite/inquiry/actFestivalAction.do?method=>

- doDetailActFestival&actId=253 (最終閲覧日:2020年10月28日)
- 樊徳恵 (2013) 搶孤民俗文化資産形式之比較〜以頭城鎮、隆教郷為例 蘭陽博物第96期(蘭陽博物館2013.01月電子報)
- 蘭陽資訊網 (2019) 頭城搶孤. <http://j7.lanyangnet.com.tw/tcclimb/> (最終閲覧日:2020年4月26日)
- 聯合新聞網 (2020) 頭城搶孤29日登場美法也來PK.(最終閲覧日:2020年4月27日)  
<https://udn.com/news/story/7322/4007023>
- livedoor (2018) スノーボードの抽象的な解説に注目:印象重視の採点基準が影響. ライブドアニュース.  
<http://news.livedoor.com/article/detail/14299815/> (最終閲覧日:2018年5月23日)
- 荻島弘一 (2018) スノボが五輪に示す「カッコよく」「よりお洒落に」 - Oh! Olympic - 五輪コラム. 日刊スポーツ. 2018年2月12日付.
- レッドブル公式サイト (online)  
Red Bull Crashed Ice Yokohama 2018に来るべき5つの理由.  
<https://www.redbull.com/jp-ja/five-reasons-to-see-crashed-ice>  
(最終閲覧日:2020年10月12日)
- 坂口さゆり (2005) EXエックス過激なスポーツ, 迫力の映像(映画案内). 朝日新聞. 2月8日付夕刊, TV案内2面.
- 臺灣規模最大の搶孤活動 (online) 臺灣宗教百景.  
[https://www.taiwangods.com/html/landscape/1\\_0011.aspx?i=21](https://www.taiwangods.com/html/landscape/1_0011.aspx?i=21) (最終閲覧日:2020年10月26日)
- 臺灣日日新報 (1935) 命懸けの櫓登り. 臺灣日日新報. 1935年8月29日付. <http://enews.lym.gov.tw/content.asp?pid=73&k=515>  
(最終閲覧日:2019年1月26日)
- 臺灣宗教百景 (online) 頭城搶孤, 台湾で最大規模の搶孤行事. [https://www.taiwangods.com/html/landscape/1\\_0011.aspx?i=21](https://www.taiwangods.com/html/landscape/1_0011.aspx?i=21) (最終閲覧日:2019年10月26日)
- TAIWAN TODAY(2011) 中元祭, 霊を供養し善を積む.  
<https://jp.taiwantoday.tw/news.php?unit=190&post=74590>  
(最終閲覧日:2019年10月26日)
- 翁正杉 (2019) 宜蘭新聞網 2019 頭城搶孤冠軍疑議待大會智慧化解!. (2019年9月3日) 永久網址: <https://www.travelnews.tw/news/?p=109979> (最終閲覧日:2020年7月7日)